

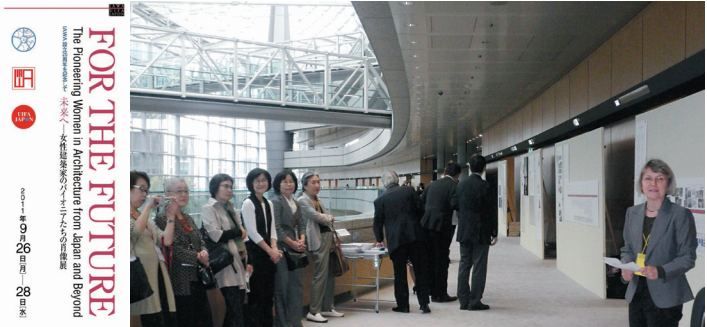
UIFA JAPON NEWSLETTER



No. 89 Nov. 25, 2011

■主な内容

UIA2011 東京大会におけるUIFA JAPONの活動報告
第52回海外交流会の会「未来の学校建築を考える」
特集：東日本大震災 会員の活動 その2
UIFA JAPON プロジェクト：岩泉町「どこでもカフェ」
連載：被災地通信—被災地人として今は—
「被災地に布団を送ろう会」を立ち上げて
連続研修会「これからの復旧・復興に何が出来るか」報告
「三陸鉄道フロントライン研修」に参加して
Beyond Disasters, through Solidarity, towards
Sustainability
訃報 武田満す氏のご逝去
災害復興見守りチームの報告
ASWA 組活動報告



(写真：北本)

UIA2011 東京大会における UIFA JAPON の活動報告 Report on UIFA Activities at UIA 2011 Tokyo 正宗 量子 MASAMUNE Kazuko

『未来へ—女性建築家パイオニアたちの肖像展』

第二回展覧会が UIA2011 東京大会の一プログラムとして東京フォーラム 4 階のガラス棟ギャラリーに展示され、天皇夫妻ご臨席の開会式のあと、大会参加者が興味深く展示を見入っていた。会場はバージニア大学のドナ・デュネイ教授のスピーチで幕を開け（巻頭写真）、ヘレナ・ルナル教授のスピーチで閉会した。

UIA2011 東京大会と千人茶会

前夜祭は六本木の森美術館でおこなわれ、ルイス・コックス UIA 会長他の挨拶、東日本大震災被災地とのネットワークによる津軽三味線演奏などの中、日本各地の地酒が振舞われた。翌日から3日間、東京フォーラム会場を中心に密度の濃いセッションやイベントが開催された。その一環として、国立博物館庭の茶室で UIA Welcome Tea Party 千人茶会が催された。半年にわたって茶人ジョン・テント氏より茶事に纏わる英語表現を学んだ UIFA JAPON 会員有志が応挙館・九条館で正客や案内役を勤め、遠来の客をもてなした。茶席のドラトゥール UIFA 会長も何度も来訪され目をほころばせていた。

第53回海外交流会の会 “ソランジュ UIFA 会長を迎えて”

27日の夕、JR 高架線下にある和食の店銀座・四万十川で海外交流会が開かれた。すこぶるお元気な会長他フランスから2名、韓国 KIFA 会長他3名、モンゴル会長他4名、通訳、会員総勢43人が、列車の通過音をBGMに和気あいあいとしたひとときを過ごした。

『未来へ—女性建築家パイオニアたちの肖像展』

UIA2011 の後、中央区女性センター「ブーケ」にて11月6日まで開催しました。引き続き、東京建築士会や国立女性教育会館での開催を検討中です。

第52回海外交流会の会「未来の学校建築を考える」 52nd International Lecture: Future of School Architecture 井出 幸子 IDE Sachiko

2011年7月23日、柳澤要氏は、内田洋行 CANVAS の多面モニターに図面や写真を映しながら、海外の教育改革と学校建築の潮流について講演された。日本にオー



柳澤 要講師 (写真：田中)

プンスクールが広がり始めた80年代、米国では、その工場的空間に現場が悲鳴をあげ、地域に根ざしたプログラム、学校の小規模化、ICT化など新たな模索へ進んできた。大規模建築のままに複数の小さな学校を組み込み、食堂をシェア

する schools within a school も興味深い。インフォーマル教育のさきがけの英国は個別指導型教育がベース。25人の小規模クラスで、低学年は小空間を目的別に使い分け、高学年は教室的空間利用。スウェーデンは小中一貫で150人程度の規模。個別化多様化が最も進む。先生1人に生徒10~12人。内部は透明感のある小部屋が連続、繋ぎの空間にPCコーナーなど。イタリアの馬小屋・修道院・別荘などの学校への転用も印象深い。フランスは最も保守的で余暇重視型。日本に最も近いのがドイツの教室型。質疑より、1. 地域との連携：地域施設内に専用クラスルーム、科学者との遠隔会議など通年カリキュラムが組まれている。2. セキュリティ：外部に対しては人々が集う気持ちの良い waiting space があるが、内部空間への安全管理は徹底している。3. 日本の学校建築への提言：調べ学習のための多様な空間は高学年の方が相応しいが、大学入試制度を変えポートフォリオ評価型にならないと空間は変わらない。

UIFA JAPON プロジェクト：岩泉町「どこでもカフェ」
UIFA Japon Project: Dokodemo Café in Iwaizumi

宮本 伸子 MIYAMOTO Nobuko

2011年10月10日、10時～15時、秋のゆるやかな日差しがさす岩手県下閉伊郡岩泉町の小本仮設団地集会所内外において、初めての「どこでもカフェ」を開きました。これは、岩泉町の仮設住宅の住民の方などに、復興を目指す中で、一息つきながらお茶を飲み、語り、また明日の力を見出して頂くことを目的とするプロジェクトで、(財)日本財団と(福)中央共同募金会の助成を受けています。

参加14名の心づくしのもてなしに、100人を超える方々が集まれ、おいしいお菓子とコーヒー、紅茶、お抹茶を味わって頂きました。また、暖かそうなセーター、下着などの支援提供衣類も喜ばれ、午後には早速セーターを着ていらした方もありました。

メンバーからは、「みなさんに喜んでいただけて嬉しい」「ユイファの中のつながりが深まった」という声と共に、「仮設住宅はショッキングな空間」「冬が厳しそう」「せめ

て集会所を少し居心地のよいものに」というご意見も。

瓦礫の中から唯一発見された夏茶碗で点てたお茶を嬉しそうに飲んで頂けた私たちも、そのお茶碗の幸に預かったように思われます。閉店後の片付けは仮設の方々の手助けで驚くほどスムーズに運び、幸先の良い「どこでもカフェ」のスタートとなりました。



岩泉町ホームページ
公式ブログ参照

夏茶碗の来歴を箱書きにするようにアドバイスする小川名誉会長とそれを見守る仮設の仲間たち (写真：平野)

連載：被災地通信 (1) —被災地人として今は—
Report from the Disaster: Updates in Sendai (1)

岩井 絃子 IWAI Hiroko

仙台市に住む私に UIFA 会員阿部さんと在塚さんが被災地を見てみたいと、すまなそうに申し出られました。喜んで是非ということである7月14、15日来仙、名取市亘理、閉上や仙台市若林区荒浜、蒲生等を御案内、既に4か月も過ぎ、瓦礫も整然と纏められ、荒地には雑草が芽生え緑色が目に入るようになっておりましたが、突如として出てくるあの恐ろしき大津波にやられた家屋敷、建物残骸に唾然とするお二人。8か月過ぎた今日でも、沿岸津波被災地はまだこんな風景がここかしこ点在しております。決して物見遊山にはなりません。どうぞ来仙してこの有態をシカと目にしたいのです。義援、支援も有難いのですが、世紀的事象です。復旧、復興とは名ばかり、あんなにのんびり気持ち豊かな生活をおった田園、沿岸の住民の方々。家族、縁者、生活の糧が突然全て奪われ、あの仮設住宅を当てがわれたからといって、今後どう生きて行けば良いのか、行かれるのか、思うだけでも辛く、遣る瀬無く、国よ、早く何とかしてあげてと叫ぶのが精いっぱい在地元人です。UIFAメンバーがかくも現地に来られ、様々な活動されていた事に驚きと敬意で頭が下がりましたが、まずは行動をしておられた事に感謝致します。建築家たるものどうぞ目にして下さい、この実態を。そして語って下さい。沢山を。今後シリーズで現地の声を伝えていきます。



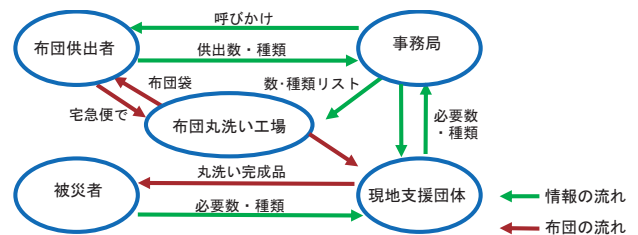
(仙台市若林区在住)

2011年7月14日若林区 (写真：阿部)

「被災地に布団を送ろう会」を立ち上げて
Sending Futon to Disaster Areas

田中 美恵子 TANAKA Mieko

凍りつくような床に、毛布1枚で身を寄せ合う被災者の姿に、無力を恥じつつ、持っているものを役立てようと考えた。公共機関の新品集めの支援に疑問を抱いていたので、独自の計画を編み出す事が第一歩であった。ものの命を大切にする日本古来の受け継ぎの文化。マータイ女史ではないが勿体ない精神・物への感謝と愛情で、良質で清潔であれば、失礼には当たらないとの自信からである。又、今様のネットではなく、顔の見える方々の参加を原則とし、図のような仕組みを考えた。古い布団を



送るには、先ず清潔にしなければならない。洗濯業界に詳しい同学の後輩の協力で、白洋社に支援を依頼。更に創始者ご一族と旧知の友人の口添えもあり、丸洗いが布団一枚¥500と破格の金額でお引き受け頂く。もう一つ感謝すべきは、佐川急便が、前橋の洗濯工場+仙台への合計送料を、布団袋1個¥1,470(当初¥4,700)と支援を頂き、提供者負担の軽減を得た。第一便を8月初旬に(新品)、第二便は現在丸洗い工場へ。現時点で敷布団計55・掛け布団60・毛布30・他に関連品を多数。現在、仙台・陸前高田市へお送りする。仮設住宅以外の方々には支援が無いとの事。又ボランティアのナース達も、ダンボールの上に寝袋での生活を余儀なくされている由。更なるご協力をお願い致します。最後になりましたが、活動資金として5万円のご援助を賜り、厚く御礼申し上げます。

連続研修会「これからの復旧・復興になにができるか」報告 Continuing Lectures on Recovery and Reconstruction

UIFA JAPON 災害復興見守りチーム
UIFA JAPON Disaster Support Team

UIFA JAPON 災害復興見守りチームは、中越地震で被災した長岡市法末集落での支援の経験を生かし、東日本大震災の被災地では何が望まれ、私たちにどのようなことができるか、支援方法を模索するため、連続研修会を開催している。UIFA JAPON ホームページで開催案内をご覧の上、ぜひご参加ください。

第1回 4月9日 平野正秀氏（東京都職員）：「仮設住宅建設支援の報告」被災直後の各地の状況と仮設住宅建設の様子についてお話いただいた。

第2回 6月18日（1）菊池紀代子氏：「田老町のいま」津波で壊滅状況となった岩手県田老町出身の菊池さんは、5月の連休に日帰り家族の様子を確認に帰郷された。明治29(1896)年の「明治三陸地震大津波」では村民の8割以上が犠牲となり、その後多くの世帯が高台に移転したが、漁民は海辺に戻り、昭和8(1933)年のM8.1の巨大地震により再び大津波に襲われた。この経験から、町民がお金を出し合い、高さ10m、総延長1350mという自慢の巨大防潮堤が戦後完成した。今回は第一波がその堤防を越え、長内川の河口沿いから新設されていた防潮堤は破壊され、防波堤内の建物も流され、4年前に菊池さんが設計して建てた姉上の家も流出。幸い、高台にあった実家は無事だった。菊池さんは堤防の上から変り果てた町の様子を見るだけで、おりに行く気持ちにはなれなかったとのこと。胸を刺される思いがして、深く印象に残った。（田嶋裕美）

（2）宮本伸子氏（UIFA 会員）：「行田市による被災地ボランティア活動への参加」*

第3回 7月2日 寺本晰子氏（UIFA 会員）：「仙台市内ひな壇造成地の崩壊ほか - 仙台市住宅相談から」*

*ニューズレター 88号参照

第4回 7月9日 濱田基三郎氏（仮設市街地研究会）：「陸前高田市長洞地区仮設住宅の支援」長洞地区のある広田半島は、広田湾と大野湾の両側から津波の浸水を受けたため半島が分断された。60世帯中28世帯が流出し、高台の家に分散避難したが、陸の孤島となったため、結束して集落の自治運営を行った。仮設住宅も自前で造ろうと、集落内に用地を確保した。仮設市街地研究会は現地での調査時に、この長洞地区の動きに接し、仮設集落づくりの支援を決め、計画地の測量準備、木造仮設住宅の視察、市建設課とのコンタクトを図った。4月25日岩手県は集落の仮設住宅を認め、プレファブメーカーに建設の発注を決めた。急転直下の展開に、研究会は造成工事の始まる前に住民主体の配置計画の作成等を目指し、仮設住宅の図面を



2011年5月長洞地区は陸前高田市の中心市街地とは津波で分断され、孤島化した。奥が広田半島。（写真：浜野）

確定し提案した結果、世帯状況を踏まえた住戸配分や集会所の設置などが盛り込まれた。（河内眞作）

第5回 8月27日 谷本勝利氏（埼玉大学名誉教授）：「海岸保全施設と津波」国の補助事業である海岸保全施設の種類の役割について説明の後、それらの施設によって津波が軽減される様子のシミュレーション画像を拝見し、今回の津波の大きさを改めて認識させられた。（森田美紀）

第6回 9月17日 加藤順章氏（UR都市機構 東日本都市再生本部）：「宮古市の被災状況と復興計画づくりの支援」加藤さんは5月から7月半ばまで、岩手県宮古市を技術支援。被災状況の把握と整理、復興まちづくりプランの検討によって復興計画の道筋をつけることが役割で、他に区画整理や防潮堤・防波堤の専門家などが派遣されていた。宮古市だけでも被災状況は様々で復興計画は難しく、一概に「高台移転」とはいえない。地域の特性を生かしながら丁寧にひとつひとつ作り上げる必要がある。住まいは高台、職場は海側という意見もあるが、日々の暮らしはどうなるのか、1000年に一度の災害に100年単位のRCの構造物で本当に良いのか、などの疑問が残ったとのこと。「丁寧にひとつひとつ作り上げる」ことの大切さを実感した。それはもちろんまちづくりでも、ひとつの住宅をつくるでも・・・。（森田美紀）

「三陸鉄道被災地フロントライン研修」に参加して Sanriku Railway Disaster Area Frontline Seminar 中野 晶子 NAKANO Akiko

7月末に津波被災地の視察（東京建築士会女性委員会主催）に行き、距離にすると150km近いリアス式海岸沿岸部を巡って来ました。中でも壊滅状態の田老地区では津波の巨大さとその海水の莫大な量を実感する現地に立ちました。

入り組んだ地形だから、豊かな緑の森や林が連続し美しい景色が折り重なるところですが、津波のつめあとは鉄橋やトンネルの多いこの三陸鉄道の駆動部に及び、3/4が現在もまだ不通です。今回のガイド山蔭さんは、それでもがんばる鉄道員です。

陸前高田から約30km内陸の遠野市では、市内の公園に従来型配置の木造仮設とは別に42棟をデザイン設置し入居が始まったところでした。6、9、12坪の3タイプとサポートセンターがデッキで繋がって、今後の長い雪と凍結の季節対策として充分計画され、コミュニティーの形成を予見できる場が設定されていました。仮設としての杭基礎構法の上にしっかり土台を据え、2年後の市民への還元も考えている自治体と東大西出和彦教授（今回の視察に同行された）のコラボレーションは、温かい知恵の結集が感じられました。

同じく内陸約15kmの住田町では、木材組合の強力な結束力で地元にも、そして沿岸部のオートキャンプ場にも、それぞれ備蓄していた木材を生かし速いテンポで木造仮設住宅の設営がされ、いざという時の地元の組織力が生かされたケースです。



2011年7月23日遠野市、木造仮設住棟を対面式に配置し木組みのアーケードが繋ぐ。木造デッキは冬季の霜、降雪対策になっている。

UIFA JAPON 事務局
〒102-0083
東京都千代田区麹町 2-5-4
第2 押田ビル (株)生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@LIQL.CO.JP
URL: http://uifa-japon.com
発行 2011年11月25日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUANTITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083
PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

Beyond Disasters, through Solidarity, towards Sustainability (UIA2011 東京大会より)

寺本 晰子 TERAMOTO Sekiko

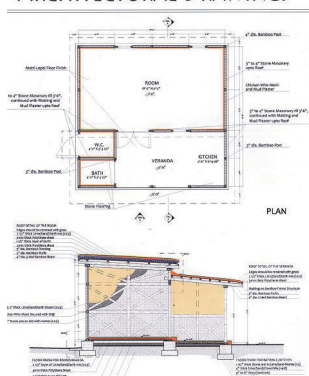
UIA 大会では、自然災害の被災地支援活動の報告とシンポジウムがあった。会議室は国際色豊かで、世界から大会を機に集う話者(手弁当!),聴衆が親しく会した会議(日・英同時通訳)だった。

基調講演は我が国から、研究者(中林一樹氏)の視点で東日本大震災の報告と自筆スケッチの復興計画だ。次いで、5カ国(建築家協会)の報告があった。ラクイア(伊)から被災文化財を調べ上げた保存計画、街の成立時からのシンボルだった教会を芯に据えたクライストチャーチ(ニュージーランド)の復興計画、AIA(米国建築家協会)のタスクフォース災害支援事業とハイチ支援、パキスタンからはカシミールでの Ms. Lari(パキスタン女性建築家第1号)たちの活動紹介で、被災者の技術習得を育む、瓦礫材を再活用する組石造や竹を構造材に利用する住まい築造マニュアル(図参照)作成、インド(UIA 理事)は、最後にガンジーの言葉「災害で物乞いをつくりだすな!」と締めくくられた。

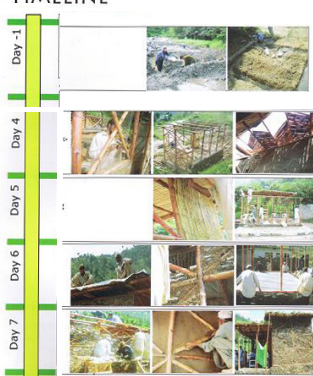
その後のシンポジウムでは、宮城から、街づくり拠点づくりの試み「まちカフェ」の報告者が加わり、3.11 被災地の状況が補完、発信された。

多発している自然災害に、建築職能をもってする支援の幅は広く、世界の建築家たちの取り組みを知る機会であった。

ARCHITECTURAL DRAWINGS



TIMELINE



■ 訃報

7月18日、UIFA JAPON 名誉会員の武田満す氏のご逝去されました。日本女子大学名誉教授(家政学部住居学科)の武田満す氏は、1976年のUIFA ラムサール(イラン)大会に参加され、UIFA JAPON 設立にご尽力くださいました。ご冥福をお祈りいたします。(編集部)

■ 役員会報告

第5回9月7日(2011年) UIA2011にUIFA JAPON会員が17名参加、UIA千人茶会やバイオニア展の準備、長洞部落会への太鼓の寄付、会員活動「被災地へ布団を送ろう会」への資金援助、第52・53回海外交流の会、NL88号の発送、NL89号の企画、岩泉どこでもカフェ企画、震災復興勉強会や法末支援などの災害復興見守りチームの活動、ソウル大会記録集作成、報告・協議。

第6回10月20日(2011年) UIA千人茶会やバイオニア展、ソランジュ会長からの礼状、ソウル特別市建築士会と東京建築士会の交流、岩泉どこでもカフェ企画、ASWA組のリーフレット、全羅北道建築文化祭への参加募集、NL89・90号の進捗及び企画、第53・54回海外交流の会、災害復興見守りチームの活動、UIA後のバイオニア展の予定、報告・協議。

■ 災害復興見守りチームの報告 UIFA JAPON Disaster Support Team - 2011年8月 暑い・熱い法末のお盆は、囲碁に、歌に、盆踊りに燃えたー 宮本 伸子 MIYAMOTO Nobuko

「囲碁まつりと心の唄コンサート・盆踊り」(主催:中越・山の暮らし大学)には、多くの近郷市民、特に腕に覚えのあるアマチュア囲碁の大家が集まった。

13日は前夜祭。14日は初めての「囲碁まつり」。著名なプロ棋士たちによる指導碁とトーナメント、森長岡市長と小川誠子六段の公開対局、心の唄バンドコンサート、山菜などに舌鼓を打つ交流会という盛りだくさんのプログラムに100名からの参加者があり、「法末では誰と誰が名手だった」という話にも花が咲いた。15日は「法末の未来を考える勉強会」やコンサート、夜は「盆踊り」を保存会の立ち上げをかねて実施、落ち着



指導碁風景

いた法末のよさを感じられる催しだった。小川六段から花のきれいな法末と褒められたことに刺激されて勉強会で盛り上がった。「花と囲碁の村法末」を念頭に、次の時代の法末を見つめる試みが始まりそうだ。

■ ASWA 組活動報告 ASWA Team Activities

「杜と海のおりゃんせ」青葉台小学校 薄井 温子 USUI Haruko

今回が6校目の青葉台小学校では、開校40周年記念事業の一環として行われた。ASWA組初めての小学校である。夏休み2日間、3年生から6年生の希望者、父兄、教師とASWA組の計60名が参加した。

2階一年生用トイレは「スイミーのおりゃんせ」で海の中を、3階二年生用トイレは「杜のおりゃんせ」で森の中をテーマに、魚や貝、あるいは昆虫や鳥が木片に描かれ、鮮やかに楽しい空間に変わっていた。暑さで疲れ気味の皆も、作品が設置されると笑顔になる。絵の具の配色や絵の材料など、ASWA組の影の力が効いている。入口天井の桧材をルーバー状に設置し、絵を2面に描き立体感を出すなど工夫がおもしろい。日本画家の屏絵を模写している小学生



■ 編集後記

遠き地のブログに写るショール見ゆいつの頃にか母編みしもの(在塚)。いつもバッグに入れている懐中電灯がそろそろ重たく感じてきました。危ない危ない(飯田)。売られ始めた年賀葉書を横目に、今年はどれだけの人が喪中だろうかと胸が痛みます(石川)。仮設の皆さんの明るさに励まされた「どこでもカフェ」(須永)。日米デザイン界をつないだ瀬底恒さんの仕事に励まされた今年でした(田中)。瓦焼き 民家のえにし 模型とし 込めた思いを 硝子棟にて(中野)。「海は明日があるんですよ」と漁師。「いつ! 帰還できるか!!!」と福島の人々。「仮設に「はな」を咲かせよう」とw/kたち(波渡)。間もなく12月、気ぜわしくなります(薄井)。「メタボリズムの未来都市展」振り返り、今への示唆を探す(井出)。